

横須賀市吉井城山第一貝塚の石器(一)

赤 星 直 忠

一、序

横須賀市吉井城山第一貝塚は生活の場である台崎先端東側の高い畑からその西側の谷にむかって貝殻を主とした廃物をすてたことから形成されたものであり、谷の最も深い部分に堆積した貝層は厚さ約2m(下部貝層)あり、その上に厚さ30—50cmの混貝土層(中間土層)があり、更にその上に厚さ30—50cmの貝層(上部貝層)があり、上に20—30cmの耕土を覆ったものである。この貝塚は谷の傾斜にしたがって北方に傾斜し急激に厚さを減じ、厚い土層で覆われてしまうのである。本稿においてはこれら貝層中の下部貝層のものについてのみに記述する。ここに石器と称するものはいわゆる石器としての形態をもつ石鏃・石匙・磨石斧・石皿・敲石・石錘と、定形礫器とよばれる自然礫に機能に応ずるよう多少加工したものと、不定形礫器とよばれる機能を達すればよいとして形にとらわれず自然のままの礫を使ったものを指すことにした。下部貝層は縄文早期末茅山上層式土器を包含するものであり、これには糟畑式土器を混在することが今回明らかにされた。したがって本稿にのべる石器はこの時期の文化遺物であり、いわゆる石器が極めて少なく、大部分が礫器であること、且つこの中には定形礫器が存在することが明かにされた。

二、石 器

いわゆる石器として形を整えたものとしては石鏃・石匙・磨石斧・敲石・磨石・石皿・石錘(?)があるがそれらも内容的には縄文中期の石器にくらべると甚しい相違がみられる。

1 石 鏃 七個採集されている。中四個(イロハニ)は玄武岩製、一個(ホ)はホルンフェルス製、二個(ヘト)は黒曜石製である。イロハニとトは材質は異なるが五例とも同形態である。即ち何れもが二等辺三角形であり、底辺が僅かに内湾を示す。両斜辺は僅かに外湾する。断面は菱形で比較的ぶ厚である。ニホは同じく二等辺三角形であり、底辺の内湾がない。ニはぶ厚であるがホは剥片の周を調整し二等辺三角形にはできて

いるが粗製である。材質の関係で自由な調整ができなかったものであろう。この斜辺は極めてわずかに外弯する。七例全部が二等辺三角形であることと底辺の弯入がない又は極めてわずかの弯入であるという共通点をもっている。黒曜石は顕微鏡下の比較によって伊豆半島産とみとめられる。玄武岩もおそらく伊豆半島産のものであろう。

2 石 匙 二個ある。共に黒曜石製。(イ)横型である。長六・二 cm 、巾三・五 cm 。断面は底辺の長い三角形である。原石からかきおとした剝片に多少加工した程度のもので、平面形は大体半月形。平らな面を下にしておくかと左端がつまみとなる。つまみの部分は少し加工して作られたもの。原石を打かいて剝片としたときできた広い彎曲した刃部は使用中刃がかけてしまったと思われるもの。この刃部にトリミングを加えれば簡単に刃がつくと思われるのに再製せずにしてしまったものらしい。(ロ)横型である。長六・八 cm 、巾三・四 cm 。断面は大体底辺の長い三角形である。原石からかきとるときうまく断面が三角形にならなかったとみえて、各所を調整している。ぶ厚なもので、底面を下にするとつまみは右にある。つまみ部分を作りだすために両面から打かいている状態は縄文中期あたりのものと似ている。平面形は長楕円形の右方につまみをつけた形である。原石から剝片をかきとったときできた広い刃部には多くの刃こぼれがみられる。

3 不明黒曜石製石器 (イ)石匙に似た形。横からみると三角形であり、斜面にあたる部分が厚くなっている。他の二辺が調整されている。一部に欠損部があるがこのもの自体はこれで完形品である。両面から調整された長い方の稜及び尖端部が使われたものであろう。(ロ)鎌を思いたすような形である。断面三角形の剝片に多少加工して鎌形にしたものであろう。長い刃が使われたものであろうが刃こぼれしたのでその部分に両面からトリミングしたもの。一端が折れている。

4 断 欠 黒曜石の断欠。一部が調整されたものが四例ある。

5 磨石斧 (イ)長楕円形に打欠いた扁平石の周と上下面を粗く磨製にしたもの。一端を主として片面からすって刃をつけている。長一〇・三 cm 、巾五・七 cm 、厚二・五 cm 。紫黒色の光沢ある堅い岩。藍閃片岩？(ロ)硬砂岩製磨石斧の刃部を含む小断欠。主として片面から刃をつけたもの。片面には打欠いた粗い面が残っている。

6 石 皿 (イ)半月形の半欠。原形は楕円形。短径一六 cm 、厚四 cm 。多孔質安山岩。(ロ)半欠。原形楕円形。短径一六 cm 、厚四・五 cm 。多孔質安山岩。(イ)(ロ)共に原形は楕円形、大きさは大体近似する。厚さ四・四・五 cm くらいのもので両面から使用し、両面がくぼんでいたもの。つき砕く作業中半分に破れたものであろう。(ハ)周が厚くなり両面から内へくぼくなった断欠。厚さ六・五 cm 。二大片が接着したからかなり大きい断欠となっ

た。もとはやはり楕円形で長径三〇cmくらい短径二五cmくらいであったであろう。多孔質安山岩。(c)他は小断欠で石皿の断欠であることがわかる程度のもの一〇個、何れも多孔質安山岩。(d)緑泥片岩製石皿の断欠。厚さ約四cm。大きい石皿であったとみられるもの。縁の部分から凹んだ皿形部分を示す断欠。裏面に凹石としてのすりばち形小穴二個がみられる。(e)石灰質砂岩。対岸久村に産するいわゆる久村石。厚六cmくらいの平らな岩塊に直径一〇cmくらいのすりばち形大穴が二個ならんであけられていたことのわかる断欠。(f)凝灰砂岩。厚四・五cmの平たい岩塊に径一〇cm内外のすりばち形大穴があったものの断欠。

7 凹石 多孔質安山岩。長径一〇cm、短径八・五cm、高五・五cmくらいの扁球自然石の上面中央に直径三cm、深一cmのすりばち形穴があるもの。

8 敲石 (i)厚四・五cmの長楕円形敲石の半欠。両側面が平らに打減。安山岩。(ii)厚三・七cmの楕円形扁平な自然石の周が平らに打減しているものの断欠。上下面にも打減痕がみられる。硬砂岩。

9 すり石 (i)楕円形扁平な自然石であったと思われるもの。上下面及び側面がすりへっている。安山岩。敲石としてあげたものほとんど形はちがわない。(ii)イと同じ。凝灰岩質。(iii)円形扁平な石。中央部に上下に貫通した軸様のものがある。おそらくこの軸様の部分を中心として沈澱凝固した細砂の塊であろう。この一面が平らにすりへっている。(iv)多孔質安山岩の扁球形自然礫。長径一〇cm、短径八cm、厚四cm。一面がすられて滑かになっている。周に打痕がある。すり石と敲石は多く同一石である。平らな上下面がすり石に使われ周が敲石として用いられている。すり石になった上下面の滑面中央には大部分打痕があり、中にはくぼみになっているものもある。台に使われたものである。(v)断欠。多孔質安山岩。使用中に上下両面がすりへってゆき、周は打撃によって次第にへってゆくから楕円扁球形の石礫のような形になるのが普通である。全形を推察し得るほどの大きい断欠五。他のものも原形の推定はできる。一にぎりに都合のよい大きさであったとみられる。使用痕のない扁球形多孔質安山岩円礫が一個ある。長径一一cm、短径九cm、厚四cm。おそらくこのような大きさと形をもつものが多く採取されてきたものであろう。

10 石錘? 比較的やわらかい砂岩。卵をおしつぶしたような形。短軸の両端にくびれを作ったもの。石錘としての用途が考えられるが、いわゆる石錘も土製錘も他には検出されていない。

三、礫

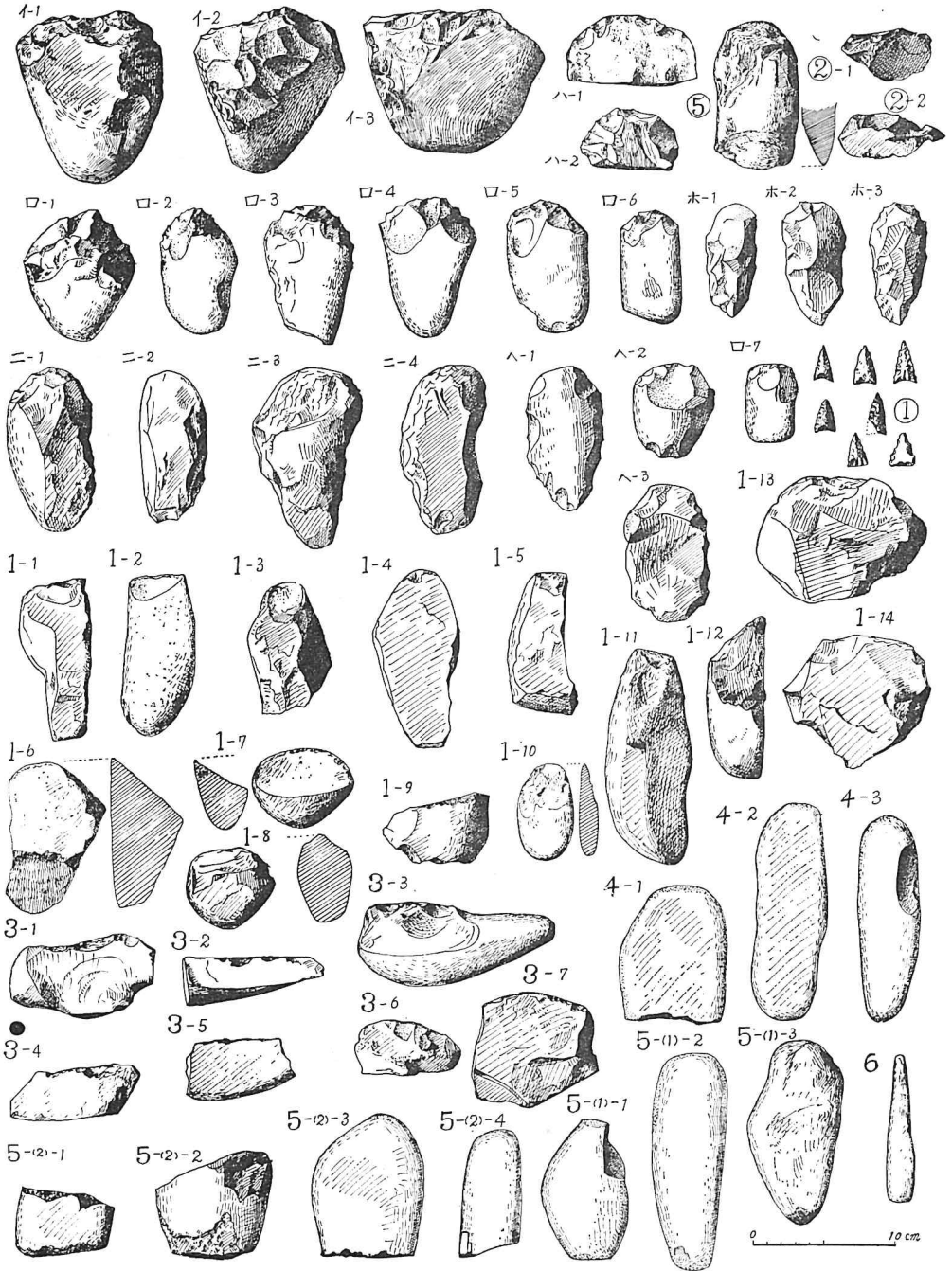
出土礫の持つ意義 下部貝層から検出された礫はみかん大箱に六個分は充分ある。円礫と岩片があるが円礫及びその断欠が大部分である。ここ

は礫を包含する地層のところでないから何れもが他から運ばれて来たものだといわねばならない。即ち何らかの用途にあてて目的で礫の産出地から運搬されたものであるから、礫のすべてに縄文人の意志がはたらいたと考えてよい。したがってそれらは何れも何かの目的にあてられた後捨てられたと考えられる。縄文人が産出地で礫を採取するときはたらいいた意志は彼らが用いる用途に対して(1)必要な形態のものを選ぶことと、(2)必要な石質のものを選ぶことが普通である。中には(3)特別何らかの興味をひいたものを採取してくるということもあったと考える。

(1) 必要な形態のものを選ぶというのは彼らが産出地において長手の礫をみたとき、ものをつき砕く杵などの用途を考え、丸味のあるものをみたとき敲石の用途を考えるといったようにその形態によって用途を考えて採取するのである。又既に杵の用途に適するものを必要としていたときには長手の礫をさがし、敲石を必要としていたときには扁平楕円形で相当重量もある堅い礫をさがし、細かにすりつぶす用途に適するものを求めるときには平らな面のあるものをさがすというように必要とする用途に適するものを選んだことは当然であろう。

(2) 必要な石質のものを選ぶということは(1)切断するための用途にあてようとするならば破碎稜が鋭い刃物となるような緻密な石質のものをを選び、(ロ)石鏃とか皮はぎナイフ(石匙)のような用途の利器を作ろうとするならばもっと緻密で鋭利な尖端とか刃とかができるものを選び、(ハ)物をすりつぶすための用途にあてようとするなら堅緻で且つ多孔質な石を選び、(ニ)物を打ち砕くための用途にあてようとするなら堅くて重い石質のものを選ぶといったように必要な目的に適する石質の礫を採取のときに選ぶはずである。即ち用途に適不適をその場でみきわめて採取するはずである。一端をわってみるということは当然であろう。長年の経験で手にとってみただけでも大体はわかったはずである(註一)。彼らの礫採取場ではどうしても入手することのできぬ石質のものは物々交換によってそれを持っている他の集団の者から得るか、さもなければそれがあるところまで旅をしなければならぬ。三浦半島の礫採取場(註二)では熔岩は入手できない。しかし彼らには凹石・石皿としてなくてはならぬ石質である。彼らは物々交換をするか伊豆の海岸への旅をするより他になかったであろう。

(3) 特に興味をひいたものというのは前もって意志があつたことではなく、礫採取地でたまたま色の変った礫をみつけたとか、特にまん丸な石をみつけたとか、珍らしいドーナツ形の石があつたとか、飴のような半透明の石をみつけたとかとかく特別興別をひくような石を見たときにはそれが如何なる用途に適するといったようなことに関係なくとも採取して来たことがあつたに違いない。幼児のポケットからすべすべした礫が出て来たり、赤い色の礫がでて来たり、半透明の礫が出て来たりしたのをみたことはないだろうか。彼はそれを何にしようとの目的はなくとも目についた石に特別の興味を寄せたときにはそれを拾って大切にポケットにしまったおくのである。我々でもどうかすると美しい小石をみると何にし



吉井城山第一貝塚下部具層石器

ようとの目的はなくとも拾いあげてみる必要があるだろう。そのすべすべした手ざわりや何ともいえぬ自然の色の美しきにそれをそのままするのは惜しいような気持ちになったことはないだろうか。幼児の心に通ずるところの多い古代人が幼児と同じことをしたであろうことは想像されるところである(註3)。

礫の石質分類 出土礫の多くは打かかれていたからこれらが何らかの意図をもってわられたものであることは明らかである。多くの礫が貝層にすてられていることはそれらの多くが使用済みのものであると考えられ、このように数多くの礫が必要であったことが考えられる。これらの礫を石質によって分類(註4)すると次の如くである。

(イ) 泥岩・凝灰砂岩・砂岩・礫岩・蛇紋岩・石灰質砂岩

(ロ) 硬砂岩・凝灰質砂岩・凝灰岩・珪質凝灰岩・緑泥石化した凝灰岩・変質凝灰岩・輝緑凝灰岩・角礫岩・変質角礫岩・黒色頁岩・ホルンフェルス・千枚岩・結晶片岩・片麻岩・輝緑岩・変輝緑岩・粗粒輝緑岩・斑斑輝緑岩・閃緑岩・細粒斑斑岩・閃緑岩・細粒閃緑岩・角閃岩・珪岩・チャート

(ハ) 緑泥片岩・絹雲母片岩

(ニ) 玄武岩・粗粒玄武岩・安山岩・石英安山岩・多孔質安山岩・多孔質石英安山岩

(ホ) 玻璃質浮石

三浦半島は第三紀層からなる。久里浜―葉山を結ぶ地溝帯周辺地に葉山層の凝灰質砂岩・凝灰質頁岩がある。この地域に葉山層をおしわたった形に蛇紋岩が露頭を出し、この中にかんらん岩・角閃斑斑岩などがみられる。葉山層の上には石灰岩・石灰質砂岩が部分的につており、その上を三浦層の凝灰岩・凝灰質砂岩・礫岩・泥岩などが覆っているから三浦層の軟岩は三浦半島全域でみられる。海岸には玻璃質浮石(軽石)がしばしば流れよる。横須賀市の小原台には厚いローム層の下に厚い砂礫層(走水砂礫層)があり、この礫層は小礫を主とするものであるがその中には拳大の二倍くらいのもを最大とするかなり大きい礫も含まれている。この礫層を構成する礫層の主なもの(註4)は硬砂岩であるが他に変質凝灰岩・黒色頁岩・輝緑岩・角礫岩・閃緑岩・凝灰岩・角閃岩・ホルンフェルス・珪岩・チャートなど秩父古成層から流出して来たことみられるものがある。本貝塚出土礫の大部分のものはこの小原台の礫層から採取できるものである。本貝塚所在地台崎の基部は小原台から西方につづく丘陵の一部であるからこの丘陵には礫層の存在が推定される。この丘陵の最高部の尾根あたりには礫層の露出はみえないが礫は各所に散在しているからこ

のあたりでも礫の採集は可能である。小原台には伊勢町部落からまっすぐのぼりつめたところに茅山上層式土器の散在する畑があった(註5)からこのあたりに茅山上層式の時期の遺跡が埋没していることは明らかであり、小原台の礫層から必要な礫を採取する目的で来た人達の一時的キャンプ場であるか、あるいは礫を採取する目的で若干期間この地で生活していた人達の生活あとであろう。何れにしてもこの時期に礫が大量に採取されたであろうという推察は誤ではあるまい。吉井貝塚人も直接小原台に採取に来たと考えてよからう。対岸久村には石灰質砂岩の露頭があるからこの石はこのあたりで採取できる。安山岩・玄武岩・多孔質安山岩が相当量来ているがそれらは三浦半島では採取できないから伊豆半島から運ばれたものと解する。伊豆半島の海岸や箱根山から流れ出る川の河原で必要な礫が採取されるから、それを物々交換で入手したか、あるいは丸木舟で直接伊豆海岸へ採取にかけたかも知れない。丸木舟が利用されるなら一度にかなり大量の必要礫を運搬することもできたはずである。黒曜石や玄武岩の如き石鏃原料も伊豆半島に求めたはずである。緑泥片岩や絹雲母片岩は秩父方面からの入手であろうがおそらく物々換によったものであろう。

四、礫 器

下部貝層から検出された礫には円礫のままのものもあるが多くのものは破碎礫である。それらの全部が縄文人の意志が働いて運ばれたものである以上、それらの全部が何らかの形で使用されたと考えなければならぬ。使用の痕せきをとどめるものがその中にあるはずである。必要に応じて若干整形したものもあるはずである。それらは機能に応ずるよう加工されたものであり、これを定形礫器とよび、機能を達すればよいとして形にとらわれることなく自然のままを使ったものを不定形礫器とよぶ。その形態から充分機能を果すことができたとみられる多くの礫も、使用によって生じた刃こぼれとか、磨滅とか、打痕とかの存在のないものはこれを不定形礫器として選出することができないから一応除外した。礫器をそれが果す機能によって分類すると次の如くである。

機能別		必要部分	痕跡
1	たたききる	鋭い稜(堅いこと・重いこと)	刃こぼれ・磨滅
2	けずる	特に鋭い稜(堅いこと)	刃こぼれ

	機能別	必要部分	痕跡
3	ひききる	長い稜	刃こぼれ・磨減
4	たたく・うちくたく	打面（堅いこと・重いこと）	打減痕
5	つきくたく	長い形（杵形）	磨減
6	穴をあける	尖頭	磨減・刃こぼれ
7	すりみがく	平滑面	平滑面
8	すりけずる	粗面（堅いこと）	磨減
9	台にする	多少とも平らな面	打減痕

定形礫器

何れもたたききることを目的として礫の先端や側面に刃をつけたものであるが次の如く六分類することができる。

イ、三角形に近い形の大形扁平礫の一边を打欠いて刃部としたもの——三例ある。一例をあげると三角形の一边を刃部としたもので、片面は自然のままを使い、片面にだけ幾度も打欠きを与えて刃部を作りだしている。輝緑岩。堅く且つ相当な重量があるからハンドアックスとして有力な石器であったであろう。刃部巾一—*cm*、長さ一二*cm*、厚さ五*cm*。

ロ、長味のある扁平礫の先端を打欠いて刃部としたもの——この刃部には数回の打欠きを加えて刃を整えている。片面に打欠きを加え、片面は自然面をそのまま残したものと、両面に打欠きを加えたものとある。前者が五例、後者が五例。何れも長さは一〇*cm*—八*cm*くらいのやや小形の礫にかぎられている。一例だけ長さ六*cm*の小さいものがある。この形の礫器が折れたと認められる打欠きのある刃部の断欠が一八例ある。打欠きは片面の多い。

ハ、半月形の礫の円周にあたる部分に打欠きを加えて刃部としたもの——弦部の長さ九*cm*と七*cm*の二例がある。ロの刃部だけの断欠の中、やや大きいものはこれに近い形をしているものがあるから、ロの断欠でなく、はじめからハとして加工されたものがあるかも知れない。

ニ、長味のある扁平礫の先端を打欠いて刃部としたほか、更に側面の片方に打欠きを加えたもの——四例ある。中三例は長さ一—*cm*内外のもの

の。一例は長さ七cmの小さいもの。これは刃部が片方の先端と一側面とにある。

ホ、長味のある扁平礫の先端を打欠いて刃部としたほか更に周に打欠きを加えて形を若干整えたとみられるもの——一〇例ある。中二例は長さ一二cmと一三cmでやや大きい。ともに一側面がえぐられたように打欠かれているのは側面の使用による欠損とみられる。ほかのものは長さ七cm—八cmで一例だけ長さ五cmの小さいものがある。これらの多くは自然面を片面に残し、他の面に対して周囲から打欠きを加えて形を整えたとみられるもの。粗製の打石斧である。多くのものがぶ厚に作られている。

へ、大形の剝片の周に打欠きを加えて形を整えたとみられるもの——七例。大体楕円形に近い形をしている。内一例は先端の刃が磨滅している。

これらの礫器は何れもが手にもって使用されたものと思われ、現在みられる打欠きの中には使用中に生じた刃こぼれとみられるものがある。

不定形礫器

礫そのものがそのまま器具としての機能をはたすものである。人類が石片を器具として用いはじめた当初からのすがたである。未加工の石片そのままが石器として使われたものであるが、その機能をはたすに必要な部分を見つけだしたところに彼らの意志が働いており、更に彼らの意志により、よりよい必要部分を作り出そうとしたことが円礫を破碎する形であらわれた。彼らは円礫を破碎するとき必要とする部分がよりよくできるように意志をはたらかしたと考えられる。

1、たたききる——この機能を満足させるためには鋭い稜が必要である。従ってその礫には堅いものを選ばれた。重いことも必要であったろうが片手で握ってたたききるためにはとにかく鋭い稜があるということが必要条件であった。この用途にあてられたとみられる礫はかなり多量にあるが使用のためにその稜が磨滅しているとか、刃こぼれができていとかするもののみ礫器としてとりだした。この中、長味のある礫の一端が打欠かれて刃部が作られたものが六四例ある。これらの打欠かれた先端は使用によって刃が磨滅したり刃こぼれしたりしている。この中に一例だけ打欠いて作った刃部を更に砥にかけたいわゆる局部磨製の礫器がある。そのほか形はさまざまであるが何れかの部分に稜を持つものが六五例ある。輝緑岩とみられるもの大形の剝片にできている稜に刃こぼれができているもの、一部が磨滅しているもの、重い角閃岩の不定多面形の中、ある稜だけが磨滅しているもの、閃緑岩礫を打わってきた稜が磨滅したもの、ホルンフェルスと思われる緻密な塊が打欠かれてきた稜に刃こぼれがあるもの、同じホルンフェルスの円礫の一部が欠けてきた稜が刃こぼれしているものなど多様であるが、それらの持つ稜がものをたたき

きる用に使われたことが充分証明せられる。

2、けずる——玄武岩・ホルンフェルス・珪岩・チャート・黒曜石など緻密な石質をもつ堅い剝片が一〇〇片以上も集められているこれらには何れも鋭い稜があり、当然その性質から「けずる」とか「きる」とかの用途に使われたと考えられるものであるが、このような堅い剝片では稜で木や骨を削っても目立つほど刃こぼれや磨滅ができないのであるがそれでも中には明らかにその稜に小さい刃こぼれがみられるものがある。

3、ひききる——のこぎりのようにしてひききることも行なわれていたことは鹿の角の切断面によくそのあとが残されている。ひききるためには長い稜が必要である。礫片の中にはそれに適當するような長い稜をもつものがいくつも存在する。その稜には刃こぼれのみられるものがあり、又磨滅のあとをとどめるものもある。彼らの持っていた用具は必ずしも単一な用途にあてられるためのものでなく、必要に応じてはなたのようにたたききる用途にも用いられるし、刃部ではない部分では敲石としての用にも使われたはずであるがひききるといふ機能に應ずる形態を持つものとすれば短かい稜よりも長い稜のあるものの方がより機能的である。この用途が考えられる礫は二四例ある。

4、たたく・うちくたく——あらゆる礫がこの用途に用いられるわけである。しかし、たたいたり、うちくだいたりしても礫には目にみえるほど痕跡を残さないのが普通である。にぎりごろな大きさのものや、やや長味のある礫はみなこの用途にされたと考えるが好んで用いた礫のほかに痕跡を残していない。この用途のために長く使用した礫はその周に打撃による粗面や磨滅が残る。長手の礫ではその側面にある稜の部分が使われるのが普通だから、その稜が磨滅している。明らかにこの用にあてられた礫は一二例ある。ある面がこの用にあてられたものではその部分だけがひどい粗面になっている。

5、つきくたく(一)——つきくたくためには杵のような長い形であることが有利ある。したがって長手の礫にはその先端部をつきくたく用途に使つたものがあつたとしなければならぬ。これも少しばかり使つたのでは先端が磨滅することはないから、たしかにこの用に使われたと考えられる礫でも使用痕をとめないものはこの用途にあつた礫器だとすることはできない。しかしこの用途には同じ礫がかなり長く使われるものがあつたとみえて先端部が打滅したものが相当数あり、中には先端部が粗面になったり、反対にすべすべになって表面の風化した部分がおちて内部の色があらわれたものもある。三一例。

5、つきくたく(二)——つきくたくためには先端がある程度の広さをもつものがあれば有利である。この目的に適するためには礫をその主軸と直角方向にうちわってスタンプ形としその面を用いればよいわけである。この目的に適するとみられる礫も多数あるがそれがこの用途に用いられた

とするためには使用によってその面が磨滅しているとか、その周の部分が磨滅しているとか、その面に与えられた力によってその面の周から剥片がとびおちているとかの痕跡を必要とする。このような痕跡を残す二五例がある。

6、穴をあける——骨角器や貝器に穴をあけるためには尖頭部のあることが必要である。しかし彼らはまだ黒曜石などを加工して錐を作ることではできなかったらしい。たまたま細長い石で先の細くなったものや、剥片の先が細くなったものを利用してこの用途にあてたと考えられる。黒曜石・玄武岩・ホルンフェルスなどの剥片で尖頭部のあるものが使われたと考えられるがそれらの剥片中には特に尖端部が磨滅しているものを検出することができなかった。しかし長さ5cmばかりの三角錐形の礫片は三稜ともよく磨滅しているのでこの用途のものと考られるし、また、組長い自然礫の一個は先端に刃こぼれと磨滅がみられるから、このような用途にあてられたと考えたい。

7、すりみがく——これは礫のまま用途は達せられる。その表面が磨滅して滑かになっていているもの。若干すりへっているものなど一〇例がある。

8、すりけずる——すりけずるためには「やすり」のように粗面であり、且つ堅いことが必要である。この用途に適するものは多孔質安山岩の断欠と玻璃質浮石が考えられる。おびただし多孔質安山岩碎片の出土はこの用途にあてられるためのものであったと考えるものである。この碎片は骨角器の加工にきわめて適当なものである。しかし骨角器をすりけずってもほとんどその稜や面の磨滅がないから多量に出土した碎片中から稜や面の一部に磨滅を持つものはわずかしら検出できなかった。玻璃質浮石の塊も十数例出土している。しかしこれらの中に磨滅痕を残すものは二例だけである。ほかは恐らく未使用のものであろう。すりけずるという用途に多孔質安山岩片が使われれば玻璃質浮石は砕けやすく用いられなかったのであろう。

9、台にする——必要に応じてどの礫でも台に使われたであろうが台にしたための打痕やくぼみを残すものは砂岩や凝灰岩などのような比較的やわらかい石質のものが多い。多孔質安山岩片にもかなりみられる。それらはその上で何かを作るとき台にしたものであろう。堅い石を台にしては骨角器など作りつつあるものを砕くおそれがあったからではあるまいか。

附——火はね痕のある礫——石器ではないがただの礫として捨て去ることのできない多くの礫がある。馬鈴薯のように丸つこい礫に多くみられることだが、それらの表面が小さいままの形にはがれた痕がいくつかあるものである。このような痕は火にあった石の表面にみられるものである。これらの中には火中にて熱せられたがため、変質したり、変色したりしたものもある。即ち火中にて熱せられたことを物語る礫なのである。熱し

た礫を水をいれた土器中に投入することによって湯にする方法は未開民族のみならず、現在でもさんかの仲間が入浴場として河原で大形のビンールをひろげ水を汲み入れ、これを湯にするとき用いている方法であるときく。吉井貝塚人もこの方法で土器中の水を湯にしたものであろう。

五、結 び

要するにこの時期の石器は必要な目的を達すればたりるといふ考のもとに形と質が選ばれたものが多かったといふことができよう。このような不定形礫器は人類が最初に使った石器であり、それが縄文早期末茅山上層式土器文化期になおきわめて多く用いられていたことが明らかにされた。これに若干加工し形を整えた定形礫器が混在し、いわゆる石器も数は少ないながら存在していることをあきらかにすることができた。しかしそれらは縄文中期あたりの美しい形を持つものにはなおほど遠いものがあり、造形意識の極めて低かったことをつくづく感ずるものである。ただ石鏃だけが異常に形が整って進歩したものであることは驚きに値する。

(註)

- (1)、筆者はこの点を理解するため礫層所在地で多くの礫をうちわってみた。その結果幾十個かを破砕した後には外観及び重量によってわってみる前に大体の見当がつくようになった。縄文人は経験によって一つ一つわってみなくても多分見ただけで必要と思う石質を判断することができたものと考ええる。
- (2)、横須賀市小原台の礫層(走水砂礫層)。本遺跡から北東3km。彼らが尾根伝いにかけることはそう遠いものではないから度々でかけたとみえてこのよくな多量の礫が貝層から出土するのである。礫層のある小原台には撚糸文土器・大浦山式土器・田戸上層式土器・茅山上層式土器・加曾利E式土器などをべつべつに出土する小遺跡が群在することが既に知られている。これらはおそらく礫をとりに来た縄文人の遺跡と解される。
- (3)、貝層内から検出された礫の中にはすべすべした小石・赤味の強い礫・餡玉のように丸い礫・ドーナツ状の礫・真中に小さいヘソがあるようにみえる円礫・餡色の半透明な礫などがある。偶然発見したものを大事に持ったものであろうが何にしようとの目的があったわけではないから、いっか他の石片とともに貝層内にまぎれこんでしまったものであろう。ドーナツ状の礫と記したものは径一〇cmほどの扁平な石灰質砂岩であり、タコノマクラなどの仲間の化石であり、上面にさくらの花びら状の文様がみえて、すてるには惜しい石である。
- (4)、横浜国立大学見上敬三理学博士の鑑別をうけた。小原台の礫層のものについても同様に標本を持参して鑑別していただいた。
- (5)、防衛大学敷地となったのでこの部分は削平されたから現在遺跡は全く不明である。